

駿河台地区「情報科学センターの転換期を迎えて」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学情報科学センター 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鎌倉, 行男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/4303

〔論 壇〕

情報科学センターの転換期を迎えて

教育研究システム課長 鎌倉 行男

情報科学センターは大きな転換期にあります。現在、駿河台地区で情報科学センターが管理する情報関係の教室は、情報教室5教室、実習室2教室、自習室1教室となっています。

情報関係教室の使用率は、2004年4月現在、一部時間帯において、センターの情報教育授業約50%、その他の授業（学部、大学院、夜間専門職大学院、教職、図書館等）で約50%とほぼ同じ割合の使用率になっています。

また、二部の時間帯においては、前者約40%、後者約60%と使用率が逆転しています。それは、学部、大学院等で情報機器を使用する授業がここ2～3年で急速に拡大してきたためです。

他に Oh-ro! Meiji システムの利活用の拡大、情報機器を利用し、ネット上から各種の情報収集を行いながらの授業等が行われているためと思われます。

さらに、リバティタワー、アカデミーコモンのように、一般教室に情報機器及び情報コンセントが設備として用意されていて、情報機器が教育の補助機器として、いつでも使用できる環境が整備されていることも、情報機器利活用向上の原因でしょう。

2006年度からは高校でパソコン授業を受けた学生諸君が入学してきます。

今まで、全学（理工学部、情報コミュニケーション学部を除く）共通の情報基礎教育を実施してきた情報科学センターの役割も変化してきます。情報科学センター専任教員が、2004年度開設した情報コミュニケーション学部に移籍したこともあります。2004年度より情報科学センターが行ってきた、情報基礎教育の企画、立案、実施等を教務部委員会の下「情報基礎教育運営委員会」が行うことになり、学部が責任を持って情報教育を実施する環境が整備されてきました。

また、最近の文部科学省の補助金の充実、専門職大学院の形成支援プログラムを含む各種の支援プログラムが充実してきました。これらに対応していくためにも、情報科学センターのあり方を含めた研究機関等の見直しが必要と思います。

高まる教育、研究支援の要求に対応していくには、新たな機関の設置と組織の見直しが喫緊の課題と思います。